

日本定住ビルマ人の変容：少数民族と多数派バマ ーのエスニシティを超えた連帯

その他のタイトル	Transformations in minority-majority ties of people from Burma residing in Japan
著者	梶村 美紀
学位授与年月日	2014-03-24
URL	http://doi.org/10.15083/00006568

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 梶村美紀

本論文は、1988年から現在に至るまでの日本定住ビルマ人の動向を、少数民族出身者を中心に、その民族的な意識の変容に注目して分析し、ビルマ本国では多数民族バマーと少数民族の間の亀裂が依然大きい中で、日本定住者の間ではバマーと少数民族出身者との間で近年エスニシティを超えた連帯が形成されていることを解明したものである。

まず序章「日本定住ビルマ人への視座」では、本論文の目的として、日本定住ビルマ人を生み出す背景、日本定住者との間でエスニシティを超えた連帯が形成されるようになっている要因、こうした定住ビルマ人と日本社会との関わりという三つの問いに答えることが、あげられており、それにそった研究史の整理が行われている。

第1章「日本の法制度と定住ビルマ人」では、1988年のビルマにおける民主化運動の弾圧以降急増したビルマからの難民に対して、日本政府が、2000年代半ば以降、難民認定ないしは人道的配慮による在留許可を積極的に行うようになり、その結果として日本に定住するビルマ人が増加して、その数が5000人近くに達していることが指摘されている。

第2章「多民族社会ビルマと少数民族」では、ビルマ本国において、独立直前の時期から今日に至るまで、少数民族がビルマ国家の中でどのような状況にあったのかが検討されており、バマー中心の中央集権的国家形成がはかれる中で、少数民族は疎外されただけでなく、安全な生活を営むことも困難な状況におかれ、早い時期から故地を離れて越境する人びとが生まれたことが指摘されている。

第3章「来日前の経歴から考察するエスニシティ」では、日本に在住している少数民族出身者22名に対するインタビューを行い、これらの人びとが来日前にビルマで経験したことから、ビルマにおける少数民族のエスニシティを、民族州に生まれ後にヤンゴンに居住したことがある人びとに見られる「再認識するエスニシティ」、ヤンゴンで生まれ育った人びとに見られる「獲得したエスニシティ」、そして民族州で暮らした人びとに見られる「活性化したエスニシティ」という三つのタイプに分け、いずれのタイプにおいても〇〇民族というエスニシティはあるが、ビルマ人意識が醸成される契機はきわめて乏しかったとしている。

第4章「日本定住ビルマ人の組織活動」では、少数民族団体を含む東京に拠点をおく36の定住ビルマ人の組織に関する聞き取り調査をもとに、これらの組織の活動の変遷を、バマーを中心とする民主化組織が生まれる一方で、少数民族の「非政治」組織が生まれた黎明期である第1期（1988～94年）、国際的な民主化組織や少数民族の「非政治」的組織の在日支部が設立された第2期（1995～99年）、民主化組織の相互連帯が形成された第3期

(2000～02年)、少数民族の政治的主張を行う組織が設立され、その相互連帯が形成された第4期(2003年)、少数民族組織とバマー中心の民主化組織の間にエスニシティを超えた連帯が形成される第5期に区分して考察されている。

第5章「日本定住ビルマ人の選択」では、2011年のビルマの民政移管後も、日本定住ビルマ人の中では、ビルマに帰国せず日本にとどまろうとする傾向が強いことが、ビルマ市民労働組合のアンケート調査を利用して指摘されており、今後、定住ビルマ人は「在日ビルマ人」「ビルマ系日本人」として生きていく可能性が高いのではないかという展望が示されている。

第6章は結論で、以上のような本論文の考察がまとめられている。

本論文の積極的意義は、次のようにまとめられる。第一に、現代日本における定住ビルマ人、特にその中の少数民族に焦点をあわせた数少ない学術研究である。第二に、ともすればこうした研究は、現状分析的な射程の短いものに陥りやすい中で、本論文は、少数民族がビルマ本国でおかれていた状況との連続上に日本での問題をとらえるなど、学術研究として高く評価しうる特徴をそなえている。第三に、少数民族出身者の組織の状況を解明し、そこにバマーとのエスニシティを超えた連帯を志向する傾向が生まれていることを指摘したことは、本論文のオリジナルな成果である。こうした少数民族出身者の動向に、ビルマ本国の動き、日本の入管行政、日本社会の対応などがどのように影響を与えたのかも、丹念に分析されている。第四に、定住ビルマ人の動向を、インドシナ難民、在日韓国・朝鮮人などの動向と関連づけて議論していることも、評価しうる点である。

審査の中では、本論文のいくつかの弱点も指摘された。それは、第一に、入管などの統計資料の使い方と、その説明に粗さが目立ち、文意が不鮮明なないしわかりにくい箇所がある、第二に、日本がなぜビルマ人の難民認定に積極的になったのかを、本論文ではASEANとの関係で説明しようとしているが、あまり説得的ではない、第三に、バマーと少数民族のエスニシティを超えた連帯は、日本特有の現象なのか、在外ビルマ人に共通してみられる傾向なのかへの言及もほしかった、第四に、「在日ビルマ人」であることの強調から「ビルマ系日本人」の形成を展望している点は、やや結論を先走っており、バマーとの連帯が志向されるようになった段階で、「〇〇民族」というアイデンティティはどのような意味をもつようになったのかの考察や、「日本で生きる」という点で大きな問題にならざるをえない名前と教育の問題などに関する考察などが必要だったのではないか、等の問題である。

しかしながら、こうした問題点は、本論文が優れた学問的成果であることを揺るがすものではない。したがって、本審査委員会は全員一致で本論文が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。